

氏名・(本籍地)	吉水岳彦(東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第60号
学位授与の日付	平成21年3月16日
学位論文題目	靈芝元照の浄土教思想
論文審査委員	主査 廣川 堯 敏 副査 小澤 憲 珠 副査 金子 寛 哉

吉水岳彦氏 学位請求論文審査報告書

「靈芝元照の浄土教思想」

論文の内容の要旨

【はじめに】

本論文は大正大学大学院研究生吉永岳彦氏が学位請求論文として提出したものであり、中国宋代を代表する浄土教者である靈芝元照の浄土教思想の特色とその成立背景を解明することを目的とした研究である。

【本論文の概要】

中国宋代は破仏や戦乱の影響などにより、仏教研究の中心地が北地から南地へ移り、思想史的にも唐代まで盛んであった緻密な教理研究から教理の民衆化へと大きく転換した時代である。その宋代において、道宣の律三大部を注釈し、律宗の祖承説を整理し、南山律宗の復興をおこなったのが元照である。元照は戒律関係著作の他、浄土教に関する著作も残しており、特にその『観無量寿仏経義疏』と『阿弥陀経義疏』は、後世、中国・日本の多くの浄土教者によって受容され、広く影響を与えている。従来の元照浄土教の研究は、わずか二十数本の論文と、思想の概略を紹介した数種の関係論文があるにとどまっている。近年、佐藤成順氏により史学的な観点からはじめて元照に関する専著が出版されたが、元照浄土教の教義体系の全体像については未整理な状況である。吉水氏は学部・大学院時代を通じて中国浄土教の研究に取り組み、近年は特に元照の浄土教思想に関する詳細な研究を発表している。本論文は吉水氏がこれまで発表した諸論考をもとにまとめたものであり、原稿用紙(四百字詰)にして八百枚を超える大著である。目次の要点を記すと以下の通りである。

序論

- 一、研究の目的
- 二、研究の回顧

三、研究の方法

四、本論の概要

第一章 元照の思想基盤と浄土教

第一節、修学状況——諸宗僧侶との関りを中心に——

第二節、浄土教への帰入——元照の時機観——

第三節、著作について

第二章 仏身仏土観

第一節、阿弥陀仏観

第二節、極楽浄土観

第三章 実践行

第一節、往生行の理解——言願行三法具足説を中心に——

第二節、観想念仏について

第三節、持名念仏について

第四章 往生に関する諸問題

第一節、臨終来迎思想

第二節、二種の往生思想

総 結 ——律僧元照の浄土教思想の特徴——

【各章の概観】

序論では、先行する元照研究の整理を行い、これまで主流であった善導との比較研究ではなく、中国宋代における寺院住持という歴史的、地域的背景を前提とし、伝記や著作から確認できる人的交流によってもたらされた諸思想の融合を、元照の浄土教思想のうちに確認することにより、その思想的特徴を明らかにするという方法論を提示している。

第一章「元照の思想基盤と浄土教」では、元照がすべての仏教者に対して、戒律と浄土教の二法門を生涯弘めた理由について、思想背景、時機観、著作の傾向等から多角的に論じている。この中、元照が修学した寺院に着目して当時の諸宗兼学の実態を明示した点や、律僧元照における謗法の自覚に関する言及は、従来の研究には見られない指摘である。

第二章「仏身仏土観」では、天台山家山外論争における阿弥陀仏の仏身仏土の議論を考慮しつつ、元照の阿弥陀仏観と極楽浄土観を考察している。これまで、元照の阿弥陀仏観は、天台山家派の思想に基づくものとされてきたのであるが、元照の諸仏に通底した仏身説の整理と、山家派の知礼の阿弥陀仏観との比較を通じて、その阿弥陀仏観が山外派や華嚴の諸師の阿弥陀仏観に近いことを論じている。また、元照の極楽浄土観についても、山外派や華嚴の諸師に依って形成されたことを明らかにしている。この元照の仏身仏土観に関する論述の中、元照が戒律經典である『梵網經』に立脚した仏身説を立てたとする指摘と、阿弥陀仏の示す有相・無相の仏身がそれぞれ観想念仏と持名念仏に対応しているという指摘は、これまで一切検討されなかった点である。

第三章「実践行」では、智円の信願浄業三法具足説の影響や、知礼の観法説との同異等、天台山家山外の両説を整理した上で元照の浄土教の実践行の独自性を論じている。このなか、元照は信願行三法具足の原則に基づけば、さまざまな行業が往生行として位置づけられるとし、九品の往生のうちでも上品上生の

行業として持戒を位置づけることにより、平生の行業である持戒の意義を高め、持戒を勧奨する意図があったことを指摘している。また、元照の持名念仏説について論じる中、元照の持名念仏は但称名号のみを指すのではなく、聞持名号の意味も含み、善導や遵式の称名念仏と相違することを明らかにしている。この元照における聞持名号は、宋代に流行した『首楞嚴經』に由来することを指摘し、宋代浄土教の特色の一端を明らかにした研究であるともいえる。また、元照の持名念仏の特色として、道宣の理事二懺の影響をあげており、道宣が『仏名經』等に基づき、阿弥陀仏の名号を称えることを劣機の行業である事懺に位置づけていることを受けて、元照は持名念仏を事懺とし、定心の念仏を勧める天台浄土教諸師の影響を受けながらも、散心の持名念仏を許していると論じている。そして、その上で道宣が劣機の衆生の罪障消除のために事懺の行業として持名念仏（称名）を行わしめるのと異なり、元照は持名念仏（称名・聞持）が事懺ではあっても多善根であり、賢愚・貴賤・善悪に関係なく、必ず阿弥陀仏の本願力（第十八願）によって平等に往生できるとしている。この点に、元照の持名念仏説の大きな特徴があることを明らかにしている。

第四章「往生に関する諸問題」では、元照の臨終来迎思想と二種の往生思想について述べている。元照はこれらの論述において、当時常識であった「唯心無相」の浄土に対して「唯心有相」の浄土を立て、西方有相の浄土への凡夫の往生が可能であり、また、仏の来迎をも認めている。この説は、延寿を初めとする同時代の諸師が、心の外に何も存在しない（心外無法）という立場から執著の対境とならない「唯心無相」の浄土説を立てるのに対し、来迎しない仏や、実には救いとられることのない無相の浄土では、臨終の苦しみに悩まされる凡夫の救済には用をなさないと考え、元照は阿弥陀仏によって法界（唯心）のなかに、本願による有相の浄土説を立て、臨終に来迎する仏を説くに至ったことを論じている。この中、日本の鎌倉期に議論される正念来迎と来迎正念の問題の先蹤が、すでに中国宋代に行われていたことを指摘したのは、本論文が初めてである。

これら四章の考察を通じて、元照の浄土教思想全体を通観し、その上で元照の浄土教思想が、阿弥陀仏の仏身仏土論をはじめ、実践論や往生の問題に関しても、戒律經典、もしくは南山律宗の開祖道宣の影響を受けて成立していることを論じている。そして、元照の浄土教が単純に天台浄土教を踏襲したもので、また善導浄土教を継承したものでないことを指摘し、元照が遵式や智円、善導などの浄土教思想や諸宗の教学を積極的に吸収して、道宣にはあまりみられない浄土教思想を独自に構築していることを論じている。また、こうした元照の浄土教思想に関する指摘を踏まえ、戒律思想に基づく特徴的な解釈を有する「律系浄土教」というものを新たに概念規定している点は、本論文の大きな功績であろう。

以上が各章の概観である。

審査結果の要旨

【本論文の評価】

さて、本論文の評価すべき点であるが、まず指摘しなくてはならないのは、これまで研究の少なかった宋代以後の浄土教という分野に着目し、なかでも後世、中国・日本の両国の仏教者に多大な影響を与えた元照の思想と信仰の内実について研究を進めた点である。特に元照は古くから戒律者としての側面が顕著されてはいるものの、自身の信仰は戒律と浄土教の双方にまたがるものであり、その二つの行業の相互の関係について明確に言及したのは、本論文が初めてである。また、従来の元照研究が、天台浄土教や善導浄土教の影響下にあるという前提で考察するのが中心であったのに対し、本論文は徹底した元照の伝歴の

研究を行うことによって、中国宋代に活躍した一仏教者としての元照の思想背景・思想形成を詳細に考察しており、この点もこれまでの研究には見られない点である。そして、このような諸先学とは異なる研究方法により、元照の浄土教思想全体を的確に把握することを目的としている。このような方法は、中国浄土教研究の新たな分野を開拓したものとして高く評価することができる。

具体的には、まず第一章の元照の時代背景や修学環境、および直接的な人的交流の整理である。従来の研究では元照滅後百年を経て成立した『釈門正統』や『仏祖統紀』、更には日本の江戸期に成立した『律苑僧宝伝』などにに基づき、天台山家派の流れに属するという元照像が中心であったが、吉水氏は元照が教理的に天台山家派と相反する点から、諸「元照伝」に加えて、元照の著述した「行業記」類、および元照の居住した寺院の「寺志」などを使用して、積極的に元照の修学の様子や同時代の諸師との交流を解明している。このことは、諸宗融合思想を特徴とする中国宋代における一般的な仏教者の修学のあり方を明示する点において、中国宋代の仏教研究に大きな成果を提供することとなる。

また、第二章以降に展開する教義上の諸問題も、各章が関連して論述が進行しており、また各章を通じて導き出された結論を統合しつつ元照浄土教の教義体系の独自性を提示している。これまでの元照の思想研究が、仏身仏土観や念仏観など、個別に議論されてきたなかで、実に貴重な成果といえる。そして、元照の仏身仏土観や浄土教実践論、往生の問題の考察を通じて、元照の浄土教思想の淵源が、天台山家派のみに求められるものではなく、広く山外派の諸師や華嚴学派の影響を受けて形成されているものであることを解明し、さらには、それらの説示が戒律經典や道宣の少ない浄土教説の内容を補足するために受容されていることを指摘している点は、従来の元照研究ではまったく見られなかったものである。

本論文では、吉水氏独自の的方法論と見解が示されており、ここに指摘した内容の一端は、今後の元照研究、および中国宋代浄土教研究に大きな方向性を与えるものである。

【本論文の課題】

以上のように種々評価する点がある一方、やはり今後の課題も残されている。たとえば、同時代諸師の浄土教思想との比較に関しても、子璿、宗暉、楊傑、義天など、対象とすべき人物がまだ多数いることが挙げられる。また、天台山家山外論争の中で行われた仏身論の議論については、さらなる精読が必要であろう。また、元照伝における大病の罹病、石刻『阿弥陀経』多善根文との出会い、元照に影響を与えた浄土教者（楊傑等）との出会い等、元照が戒律から浄土信仰へと傾斜してゆくプロセスの解明もいまだ十分とは言えない。さらに、本論文はあくまでも元照の浄土教思想の研究が目的であったが、やはり元照の人的交流や思想形成の流れをより鮮明にするためには、当時の戒体説の議論において元照がいかなる立場をとっていたかなど、戒律思想の諸問題の整理・把握もさらに必要であろう。

内容的にも、元照が唯心己性の有相浄土を立てているとしているが、その根本となる元照の「心」の定義とはいかなるものなのか、あるいは、元照の「唯心」の理解とはいかなる背景のもとに成立したものであったのかなど、問題も残っている。また、二種の往生思想を提示するなかで、未死の往生が『観経』所説の観想行によって自らの想念を極楽浄土へ送ることであると論じているが、このことが南山律宗の思想背景にある法性宗的な唯識理解とどのように関連するのかということも考えねばならない点であろう。

上記のように多数の課題は残されてはいるが、これらは本論文をまとめ得たからこそ提示された新たな課題であり、本論文が今後の元照研究の基礎となることの証左でもある。

【結語】

以上のように種々の将来的な課題はあるものの、本論文は従来の元照研究とは、方法論的にも結論的にも大きく一線を描き、中国宋代浄土教研究という分野にさらなる進展をもたらすことを期待させるものであり、同時に元照の浄土教の独自性を明確に提示した貴重な研究成果として高く評価し得るものである。よってここに本論文が博士（甲種・仏教学）に十分に値するものと判断し、学位に相当するものと認定する次第である。